

「あっくん、あっくんだけやないわ。うちの母さんやって同じやで。それに、おばあちゃんやって。みんな、何も思わんと生きてきたわけやない。私やって——」

美海の、言葉にならない涙が、頑なな敦士に迫る。弘章や渚の胸にも広がる。どんな言葉も、今の二人の心を癒やすものにはならない。中途半端な言葉は誤魔化しにしかない。

渚が口を開く。

「私ね、みんなに話してなかったことがあるの。この島に来た理由とか、大学でしてることとか、嘘じゃないんだけど、本当はもっと別な理由があって」

一つ大きく深呼吸をして、テーブルを見つめたまま続ける。

「私の大叔母、おじいちゃんのお姉さんはね、実は、大島にいるの」

その一言に、その場にいたすべてが渚の意図を悟る。

「うん、大島青松園。国立ハンセン病療養所。元ハンセン病患者。

私ね、全然知らなかったの。高校生になるまで。高校のとき研修で行って、たまたま出会ったおばあさんがその人で、調べていくうちに本人だっていうことが分かって。そんなことお父さんも知らなくて。おじいちゃんが何も言ってなかったから。

けどおじいちゃん、言えなかったんだと思うの。覚悟して行ったお姉さんのためにも、私たちが差別を受けないためにも。だからずっと、自分一人で抱え込んで。何十年も。

そのことを知ってからいろんなことに関心を持つようになって。差別のこととか、政治のこと。大島だけじゃなくて、岡山のハンセン病療養所のこと。アイヌや部落差別や在日のこと。ヒロシマやゼロウェイストや、それに、豊島のこと。

これはね、大叔母やおじいちゃんが、私にくれた宿題じゃないかなって思ってる」

美海ちゃん、と呼ばれると、美海はうつむいていた顔を上げ、渚と視線を合わせた。

「私も実は、大叔母のこと知ったとき、びっくりして、ショックで、家を飛び出したの。

——みんな、何も思わずに生きてきたわけじゃないんだと思う」

少し微笑む渚を、美海は言葉を返すことなく見つめた。

敦士が噛みついてきた。

「形あるもんはみな、いつか壊れて、消えて、なしなるんや」

前日した話の続きを聞いているようだと、美海も弘章も敦士に視線を寄せる。

「四〇億年もしたら、地球上のすべての生き物は死滅するし、それまでやって、いつ隕石の衝突や、地軸の変化、気候変動で生き物が死滅するか分らん。人類が誕生して二〇万年。たった二〇万年やで。アフリカ大陸からここまで辿り着いたのなんて、たったの四万年前やわ。この五億年の間やって、何回大量絶滅があったと思う？五億年いうて、四万年の一万倍以上やで。本当に小さいことや。差別も戦争もゴミも、ほんまにちいさいことなんや。あんたの言よることやん、全部——

全部意味がないんや」

睨めるように敦士が渚を射る。

「敦士！」

突然部屋に入ってきたその怒鳴り声に、全員の視線が集まる。敦士の放った言葉に反応したのは、渚の知る人物だった。

「おじさん！」

みんなが旧知のごとく、口々に声をあげた。民宿のおじさん、植村だった。

「敦士、もういっぺん言うてみ。お前、みんなの言うところが分らんのか！分らんのやったら、そんなんやったら、もうわしの船にやこ乗らんでええわ！」

「えっ、あっくん、植村のおじさんの船に乗っとん？」

敦士の母以外は、それで初めて察した。

「こいつが船に乗りたい言うからよ、漁師の見習いになるんやったら思て乗せてやっとなや。」

敦士な、お前の言よることは屁理屈じゃわ。意味のないことやこ、この世の中に一つもないぞ。ぜーんぶのことに意味があるんや。壊れようが、消えてなくなろうが、みんな意味があるんや。お前が言よるみたいにな、形のあるもんには囚われとったら、ほんまに大事なことがなんちゃ見えんようになってしまうぞ！」

植村の迫力ある声に、みんな圧倒された。その姿に、当時の運動の影が見えた気がした。そして思い出すように、植村が言葉を紡いでいく。

「雄一とはな、わしはずっと一緒に運動しとった。あいつなりに苦しんどったことも、よ一知っとる。あいつが元気なとき、わしらは合言葉みたいによう言うた。この海を、この島を綺麗にして子や孫に残さなあかん言うてな」

部屋に入ってすぐ傍にいた節子が、植村さん、と両手を差し出して、落ち着かせる。それを片手で応じて、大丈夫だ、と制止した。植村が続ける。

「昔、まだ今みたいに産廃が撤去されとらんかったとき、近所のばあさんが、街に行った息子に島の野菜を送ったらな、『こんなもん二度と送ってくるな』いうた言われてな。泣いとったわ、ばあさん。

島の中学生は修学旅行でな、野球観戦にドームに行たら、香川県豊島中学校ってモニターに映し出されて。ほしたら観客が、『ゴミの上を通学してるのか』いうて馬鹿にされて。わしらがいったい何したいうんや。子どもに何の罪があるんや。そんなんで、若いもんも子どもも島に誇りなんて持てんわ。

ほやから、わしらは、わしらの代で壊したまま残したらあかん。これはわしらの責任なんやいうて、なにもかも犠牲にしてやってきたんや。節子さんやって、雪乃さんやって、佳代さんやって、いろんなもん背負てやってきたんや。それが何や、意味が無いいうんわ、ほんまに情けないわ」

怒りではない、哀しみ。それは、植村だけのものではない。節子も、雪乃も、佳代も、あの時代を生きた者すべてが受けた哀しみだった。廃棄物がすべて撤去されたからといって、すべてが元通りになるわけではなかった。失ったものが還ってくるわけではなかった。それでも、自分たちの時代で起こしてしまったことにケリをつけるために、あらゆるものを犠牲に生きてきた。切り裂かれた傷口は、未だ癒えてはいなかった。

「あのときの年寄り連中も、もうほとんどおらんようになった。それでもまだ終わってない。元通りになっとらん。ほれに若い者はどんどん島を出て行ってしまう。わしらはいったい何のためにやってきたんか」

落ち着きを取り戻した植村は、我が身をふり返りながら、そして抜け殻のように言った。

「敦士、お前の言うように、意味のないことかもしれんなあ。元に戻すことも、今までのことも」

自虐的な言葉のなかに、あとに残される者の寂しさが滲む。この年寄りを残していくのはいったい誰か。

「おじさん、そんなことないよ」

渚が恐る恐る応える。

「敦士くんの言うことも、確かにそうだけど、おじさんたちがしてきたことは意味のないことなんかじゃないよ。人を変えて、世の中を変えてきたじゃない。まだ十分じ

やないこともあるかもしれない。けど、今につながる教訓を、いっぱいつくってきたと思う。

私なんかには分からないけど、苦しい思いをしてでもここまで辿り着けたのは、おじさんたちのおかげだよ。絶対に意味のないことなんかじゃないよ」

一人にしてはいけない。これ以上この人を一人にしてはいけない。

「——そうか、意味がないことはないか。そうか、ありがとうな、渚ちゃん」

立ち尽くす植村は肩をふるわせ、押し殺すように嗚咽する。

「——ごめん、なさい」

敦士の言葉が想いとなり、部屋の真ん中に小さく灯る。

*

水平線に小さな雲が、横一列に並ぶ。大学の前期試験が終わった八月の夏空。およそ一ヶ月ぶりに豊島への高速艇に渚は乗り込む。夏休みということもあってか、島に向かう船は観光客で賑わっていた。強い日射しに照らされ、瀬戸内の海はキラキラと輝く。

港に出迎える三人の顔は清々しく、どこか精悍な表情をしていた。暑いねえ、と汗をかいた笑顔に、こんにちは、と三人が駆け寄る。渚だけがレンタサイクルを借り、四台の自転車は海のレストランを目指す。

「結局私たちは、『今』でしか生きられないと思うの。敦士くんの言うように、私が考えてることも、長い地球の歴史のなかでは無駄だっていうことも分からなくもない。それでも私は、自分の思うように生きてみたいの。何かのために、誰かのために生きてみたいの。たとえそれが儂いものだとしても。それが私だから」

「……それも結局、エゴじゃないん」

フォークを皿の上でぐるぐる回しながら敦士が言う。冷めた言葉で渚の言葉が凍る。

「……うん。そうだね。エゴだね」

「エゴでええやん！ あっくんやって散々エゴやってきたんやから」

言い返す美海を、弘章が聞き取りにくい声でモゴモゴと援護する。

「それぞれの命と、それぞれの幸せを大事にできたら、エゴでもええんちゃうん。ど